

7 「風土」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2014 in Ensyu

「風土」分科会では、「塩の道エコミュージアムの形成」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	NPO 法人三遠南信アミ	理事長	黍嶋 久好
報告者	三遠南信住民ネットワーク協議会	代表世話人	田中 孝治
行政	飯田市	市長	牧野 光朗
行政	田原市	市長	鈴木 克幸
行政	松川町	町長	深津 徹
行政	阿智村	村長	熊谷 秀樹
行政	天龍村	村長	大平 巖
行政	大鹿村	村長	柳島 貞康
行政	駒ヶ根市	市長	杉本 幸治
経済	磐田市商工会	会長	野寄 宏之
住民	みなと塾	代表	加藤 正敏
住民	みらい企画 律	代表	矢澤 律子

(敬称略)

■はじめに

コーディネーター／

NPO 法人三遠南信アミ 黍嶋理事長



皆様、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました、三遠南信アミの黍嶋と申します。

どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、飯田市長をはじめ田原市長、各町

村長、商工会長、住民団体の代表の方々と三遠南信住民ネットワーク協議会の田中さんにご参加をいただきまして、この分科会を始めさせていただきます。

先の全体会で、新しい SENA の組織についてはご報告があったと思いますが、今回、南信州から駒ヶ根市、飯島町、中川村、宮田村が、西遠から掛川市、菊川市、御前崎市、牧之原市が、商工会では南信州の飯島町、中川村、宮田村の商工会が正規なメンバーとして加わっていただき新たな出発ができたとの報告がございましたので、よろしくお願いいたしますと思います。

本日の分科会には、駒ヶ根の市長さんにおいでいただきましたので、また後ほどご報告やらご意見をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、進め方でありませけれども、最初に、昨年度の「風土」分科会の報告を事務局からさせていただきます。

続いて、三遠南信住民ネットワーク協議会の田中孝治様から、「祭り街道を活かす活動について」ご報告をいただきたいと思います。

その後、地域資源の活用事例ですとか工夫されていること、今後の事業にどうつなげていくかということも含めて意見を賜りたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたしたいと思います。

それでは事務局から、昨年度の分科会の報告をさせていただきますので、お聞き取りください。よろしく願いいたします。

事務局

それでは、前年度の議論についておさらいしたいと思います。

前年度、風土分科会では、あるもの探しの三遠南信の底力を探そう、使おうということで、議論がなされました。

1点目としまして、フレッシュな感覚で資源をさらに発展させていくことが必要、そういったものを体系化して、まずは小さな地域ブランドをつくり、そして最後には全体として三遠南信のブランドとして確立していくような整備が必要ではないかということ。

2点目といたしまして、それらをただ並べるだけではなくて、時間軸を追って、いつどのように誰がどうやっていくのかという、そのプロセスを組み立てていく必要があるのではないかということ。

3点目といたしまして、今までつくり上げてきたすばらしい計画をチェック・アンド・トライしていくということがこの次の方向として大事になってくるのではないかという、以上3点が前年度の議論としてまとめたものとなります。

今回の議論のテーマでございますが、塩の道エコミュージアムの形成に向け、自然、歴

史、文化、産物など地域資源を見つめ直し、それらを生かした三遠南信の魅力の発信力を高め、地域固有の商品、サービスの提供により、三遠南信地域における持続的な観光客誘致等を推進する塩の道エコミュージアムの形成をどのように進めるかを、テーマとして設定をいたしました。

事務局からの説明を終わらせていただきます。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございます。

昨年度の振り返りと今回のサミットの分科会との接点が難しいかもしれませんが、今、報告がありました三つの視点を少し頭の中に入れていただきまして、今後の議論と合わせていただければと思っております。

最初に三遠南信住民ネットワーク協議会代表世話人の田中孝治様より、「祭り街道を活かす活動」ということで、この三遠南信地域の活動状況等の報告をいただきます。

午前中に住民セッションが行われておりますので、その中のお話ともかぶるかと思いますが、田中さんどうぞよろしく願いいたします。

■報告

三遠南信住民ネットワーク協議会

田中代表世話人

ご紹介いただきました三遠南信住民ネットワーク協議会の代表世話人をやっている田中です。

サミットの開催地が代表世話人になるルールで、私は来年3月末まで。来年度は、三河に変わるという仕組みです。

「風土千年、風景百年、景観十年」という言葉がございます。ここは風土の分科会ですので、千年の人々の暮らしの重み踏まえての議論になりますので、少々重いテーマと感じ

ています。

「交流」「発酵」「熟成」と書きました。上の写真は、先月（平成26年9月14日）開催された「祭り街道の会」の15周年記念のときのイベントの写真です。上の二つ、左が「遠州大念仏」、右が今回、国の重要無形民俗文化財になりました「和合の念仏踊り」です。

実は、二つを見てみますと似ているところがあります。詳しいことはよく知りませんが、聞くところによりますと現在、「和合の念仏踊り」が踊られている宮下さんの御先祖は遠州のご出身で、その縁で「遠州大念仏」に近いお祭りが和合のほうでもやられているというお話しです。

それから、この二つは「花祭り」ですが、これは伊勢流の雅楽の流れをくんでおり、静岡県北部、愛知県奥三河に非常に広く伝わっているお祭りです。古代、平安時代、室町時代にも、この三遠南信地域は、孤立した山間地でなく、行く筋もの街道を介して京大阪、あるいは東海地域の文化が非常にたくさん流入していました。その中で交流した文化が、時を経て「発酵」「熟成」されてきているものが、これらのお祭りになっているのではないかと思います。

三遠南信地域というのは、今でこそ山間の地であるのですが、我々が考え、想像する以上に外との交流の多かった地域ではないでしょうか。それは今でも変わらないのではないのでしょうか。この地域は、孤立した山間地ではなく、むしろ交流の中でこそ成り立っている地域なのだということが重要なのではないかなと思います。

それから、先ほどから皆さんの話題に出ている新東名は、静岡県内が既に開通、さらに西に伸びてくる。三遠南信道も北に伸びてくる。リニア新幹線の話も出てきます。これから新しい道が出来てきます。ますます交流が活発になりますし、活発にしていかなければなりません。

道をつくるということも非常に重要で、我々住民の立場からも道づくりに協力、参加して行かなければなりません。しかし、さらに大切なことは、新しい道を如何に使いこなしていくか、「道使い」が問われる時代ではないかと思っています。ですから、「道づくり」と「道使い」はセットで考えなくてはなりません。

その中で、私はこう考えています。「人」「物」「情報」の交流がよく出てくるキーワードなのですが、「人が動けば物と情報が動く」、「物が動けば、人と情報が動く」、「情報が動けば人と物も動く」ということで、人、物、情報というものは非常に密接な関係で動いている。物の話、人の話、情報の話を分けないで、この三つを関連させながら、どこか一つを動かすとほかのものが動いていくという関係で、交流というのを考える必要があると思っています。

「道使い」、道を如何に賢く使っていくかということは、道路行政に携わる国交省道路局の方たちとお話をすると、「道をつくりたいのは分かりましたけれど、つくった道をどうやってお使いになるのかも考えて欲しい」といいます。つまり、地域の「道使い力」が問われてくる時代です。道使いの提案如何によって、道路の建設が遅くなったり早くなったりということも出てくるような時代になっているのではないかなと思います。

それからもう一つ、高速道路、高規格道路というのは、交通圏、交流圏を飛躍的に拡大させる力を持っています。地域にとって非常に重要な社会インフラですが、私たち沿道住民の立場からすると、高速道路や高規格道路などの下にある既存の旧道、街道、枝道をセットにして道使いしていくことが、とても大事だと考えています。そうでないと、折角道路が出来ても、むしろ通過地帯になってしまうという心配が無いわけではありません。

ですから、高速道路つくる、高規格道路を

つくる、と同時にバイウェイと呼ばれる下道の利用というものを真剣に考える必要があるのです。むしろ、高速道路ができることによって、下道の価値が下がるのではなく、新しい価値と魅力が創造できると考える必要があります。ハイウェイが広域性、利便性、時間短縮の効果があるのだとしたら、その効果を下道が如何に受けとめるかを考えないと、通過地帯になってしまうという心配があるのではないかなと思っています。我々は、下道をどうやって活かしていくか、これを重点に考え、活動しようとして考えております。

先ほど SENA の説明の中で、SENA は行政と経済界を中心に構成されるという話がありました。SENA の組織構成という点では、それでいいのですが、地域の担い手という点では、「行政セクター」があり、経済界の「企業セクター」があり、さらに地域に住んでいる「住民セクター」が加わって、この三位一体で地域を支えていく必要があると思います。と同時に、「住民セクター」の役割の重要性を我々自身も考えなくてはいけないなということ常々考えているところです。

「地域活性化」という言葉が頻繁に出てきます。我々も地域活性化を目的に組織をつくり、活動しているのですが、では「地域活性化とは何なのか」と改めて考えると、人によって解釈が違います。私は自己流に、「住みたいと思う人が住み続けられること」、そのための諸条件を整えていくということが、実は活性化ではないのかなと思っています。

住みたいという方が住み続けられる条件を、この三位一体のセクターで整えていくと。その中で、我々「住民セクター」の役割があるのではないかと考えております。

「三遠南信住民ネットワーク協議会」の話になるのですが、2005 年の 13 回サミットの時に、住民セッションが始まりました。それ以来、皆様のご支援をいただいてサミットの度に住民セッションを開いてきましたが、

七夕様のように 1 年に 1 回会ってまた別れるという状況でした。2011 年、前回の浜松大会の時に、参加者の中から「1 年 1 回では話がなかなか前に進まない」とい意見が強く出てきました。もう少し日常的に相談ができたり、顔を合わせたり、出来ることがあれば具体化していく、そういう仕組みが欲しいという声が出まして、2012 年に三遠南信住民ネットワーク協議会が発足しました。

発足から 3 年が経過しました。この間、協議会を構成する団体や個人の活動を基本に、協議会自体はプラットフォームの役割で、個々の団体の活動を紹介し、連携の手助けをしてきました。これからも個々の活動や事業を基本にすることは変わりませんが、もう少し協議会自体の方針、活動テーマ、取り組みを整理していかないと力が分散してしまうということで、2013 年、前回の 21 回、飯田大会の折りに「三遠南信『地縁店』の展開」、「三遠南信『祭り街道』の連携」、「三遠南信『芸術・文化・スポーツ街道』の展開」という三つの基本方針というのを打ち出しました。今、掲げた三つのテーマへ向かって動き出しているところです。

現在、協議会加盟は 51 団体・個人です。入退会自由の組織なものですから、正確にははっきり掴みきれないところがあります。会費もありませんので、事務局運営は各当番地区の手弁当で運営しています。

これは設立総会の模様です。今のところ協議会として独自事業をやるだけの事業費がありませんので、仲間を増やしながら、各方面からの支援、協力を仰ぎ、個々の団体の活動や事業を“寄って集って、盛り上げよう”を協議会活動の中心にしています。

それからもう一つ。私自身もそうですが、地域づくりに携わっている間に年をとってしまったという人も結構たくさんいます。そうした方々の貴重な体験、経験、知恵というのは、やはり非常に大切です。

しかし、それだけですと違った感性、新しい発想、新しい知恵も出てきません。そこで、年長者の経験、知恵と、若者の感性と行動力をこの協議会の場でうまくコラボレーションしよう、協働しようということが一つの大きな目標です。

人口減少、高齢化という話も多いのですが、地域の中をよく見ると新しいタイプの若い方たちが増えているのも事実です。IターンだったりUターンだったりいろいろですけれども、その方たちとうまく連携をして、新しい切り口とか知恵を見つけながら前に進んでいこうと考えております。

今年度打ち出した三本の柱は、新規のものというわけではなく、協議会が取り組んできたこと、あるいは個々の活動団体がやってきたことを整理し、三つのプロジェクトにまとめました。

一つは、「三遠南信地縁店」の展開。地域と地域の地縁、歴史的な出来事の地縁、人と人の地縁とか、地域にはいろいろなご縁があります。三遠南信地域の中でいろいろな地縁を探し、いろいろな地縁で結ぶ「地縁店」のアンテナショップを三河地区、信州地区、遠州地区に一店つくっていこうというのが当面の目標です。将来は、地縁展開という形で、各地域に「三遠南信地縁店」を拡大できればいいと思います。

三河店については今、道の駅「もっくる新城」が建設中です。新城市の穂積市長さんからお話がありましたように、私たちも新東名の新城 IC は、三遠南信地域にとって大きなゲートウェイの一つになると期待しています。建設中の道の駅は、ぜひ三遠南信地域、特に三県境に近い中山間地域へのゲートウェイとしての機能、役割を担った拠点にして欲しいと、穂積市長さんと市議会へ要望を出しました。

新城市議会からは採択との通知をもらいました。具体的には、設置者や指定管理者とい

う相手さんがありますので、これから相談させてもらいたいと考えています。いずれにしても「もっくる新城」は、三県境中山間地域の大きな拠点になるのと思っています。

それから遠州店については「まちなか軽トラ市」をやっております。これはもう何年も前から三遠南信地域の特産品を月2回の軽トラ市で販売しています。

また、南信州店については、この席に飯田市の牧野市長さんがいらっしゃいますが、協議会メンバーが天龍峡活性化センター「あざれあ」の指定管理をさせていただいているものですから、その中に三遠南信コーナーも設けています。一応各地区のアンテナショップ的なものができ上がりつつある状況です。

「地産池消」という言葉がありますが、「互産互消」、つまり自信を持ってつくったものをほかの土地の方にも味わってもらおうという意味で、「地産池消」と同時に「互産互消」という圏域循環が必要ではないかと考えています。「地縁店」のを展開は、圏域循環の核になります。

それから、「祭り街道」については、中日新聞さん非常に大きく取り上げてもらいました。「祭り街道」は、遠州街道と呼ばれる国道151号を中心に、秋葉街道の国道152号、それから遠州側の姫街道の三つあわせて「祭り街道」というコンセプトで三遠南信地域の連携を図ろうというものです。

特に、三遠南信地域のDNA、遺伝子は何かと考え、千年の歴史、風土を何で表現するかといたら、やはり一つは“祭り”だと思います。ですから、“祭り”をキーワードにして三遠南信地域がまとまっていく、大方のご賛成を得られる一つのコンセプトになってくると考えています。

ここに遠州街道とか秋葉街道とありますが、街道名というのは一般に向かって行く方向に名前をつけるものですから、例えば信州の方にとっては遠州に向かうときに遠州街道とい

ういい方をします。いずれにしても現在の国道 151 号、国道 152 号が中心になります。また、この「祭り街道」は新東名、三遠南信道のバイウェイ、下道に当たり、沿道連携による下道の新しい価値創造の材料になります。

「祭り街道」は、情報が動けば人と物が動くということで、道の駅を一つのステージに考えています。三河の拠点、遠州の拠点、信州の拠点ということで、各地の祭り関係の施設、あるいは道の駅に三遠南信の祭り情報コーナーみたいなものをつくらせていただいて、この圏域の中のお祭りを紹介しながら、地域活性化に結び付け、あるいは出来ればその地域のお祭りを継続できるような、何らかのお手伝いをしていけないかなと思っています。

特に、「道の駅の連携」を非常に重視しております。ご存じのように、道の駅というのは自動車利用者の休憩やトイレ、道路情報や地域情報提供、特産品の販売という機能を備えています。もう一つ、私はこれからの道の駅というのは地域創成の拠点、道論ではゲートウェイ、下道創成の拠点の役割、機能を担っていくべきではないかと思っています。

しかし、最近の道の駅はともすると物を売ることだけに熱心になってしまって、他の機能のことが少ないがしろになっている感じもしないわけでもありません。道の駅も道路の性格で様々です。三遠南信県境部の道の駅は、大幹線道路の道の駅とは違います。道路利用者と共に、地域の人々が集い、活動する拠点になってもいいはずですが。

道の駅は、災害対応拠点になるという面がありますが、いつも非常時というわけではありません。やはり地域を創成していくための拠点という役割を道の駅に担っていただけるとありがたいと思います。

最後に「芸術・文化・スポーツ」ですが、協議会として事業を直接やるというより、催しやイベントへの後援依頼があればどんどん後援を出しています。また切符販売や誘客の

手伝いが欲しいといわれれば、相互にパンフレットを持ち寄っていただいて宣伝し、お互いに紹介し、チケットを売り、客さんをお互いに増やす応援をしています。「寄ってたかって、盛り上げる」です。催し物応援団という形で広げつつあります。

この芸術・文化・スポーツは若い担い手が多いので、協議会を通して知り合った若手には、他のテーマにもご参加をいただき、若い感性、発想、手法でやってもらいたいと期待し、働き掛けています。

この三本柱が協議会の今年度の事業方針です。来年度は、幹事が三河地区の当番になりますが、具体化の段階で修正を加えながら、何年か繰り返していった内容を充実していこうと思っています。

住民組織のことで、組織力や資金力があるわけではありません。どうしても歩きながら考え、行動していくしかありません。それでも半歩、一歩、少しずつやっっていこうというのが、今の協議会の方針です。

先ほど言いましたように行政、それから経済界、住民というのが三位一体になって地域を支えていくということしかないかと思えます。お集まりの皆さんにもぜひ私たちの考え方や活動をご理解いただき、一緒にやれることがあったらぜひ一緒にやらせていただければなと思っています。

以後の意見交換の材料にさせていただければありがたいと思います。ありがとうございました。



■意見交換

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

田中さん、ありがとうございました。

お手元の三遠南信サミットの資料集に田中さんの資料がございますのでお目通しをいただきたいと存じます。

今、田中さんから五つほどのご提案をいただきました。新しい道をつくるということとその道を使うという視点では、この三遠南信地域にあります、国道、県道、市町村道、農道、林道を含めた幹線道路とか下道、脇道等の、新しい使い方が生まれてくるのかなと感じました。

何かご質問がございますれば、いかがでしょうか。では、ないということで、進行させていただきます。

それでは意見交換に入らせていただきます。

私からご指名をさせていただきます。12名の方に1人1回は、ご発言いただくということになりますので、発言時間を3分程度ということで、短くて申しわけないのですが進めさせていただきます。

最初の発言は、地域の特色、特長を生かした物産、行事等活用した地域おこし、地域づくりの取り組みと地域資源を使ったプロモーション活動も含めて、ご発表いただきながら情報を共有していきたいと思っております。

では最初に、飯田の市長さんからお願いいたします。

飯田市 牧野市長

それでは、私から口火を切らせていただきます。

ちょうど昨日なのですけれども、テレビでもごらんになった方もいるかと思いますが、浜松市と私ども飯田市との境にあります兵越峠におきまして、峠の国盗り綱引き合戦が行われました。

4年ぶりに信州軍が負けまして、今日ここ

に私はさらし首をさらしに来たという話もあるのですけれども、そのぐらい盛り上がっております。

この峠の国盗り綱引き、今年で28回目を迎え、それだけ長く続いてきたというのも大変意義があることかと思うのですが、もともとの始まりは南信濃村と水窪町の商工会青年部の皆さん方が、お酒を飲み交わしているうちに綱引きでもやりましょうかみたいな話を始めたのがきっかけと聞いております。

それがどんどん話が大きくなって今に至っているわけでありまして、昨日も、それこそテレビ局各局がカメラを並べて、わずか、時間にしてみれば恐らく10分間ぐらいの三本勝負をずっとテレビに収録されていたというような状況でありました。それが、言ってみればこの時期の風物詩として全国に放送されるというようなことになったわけでありまして。

そうした発信力を持ってきたことによりまして、今年度はサントリー文化財団が主催いたしますサントリー地域文化賞まで受賞するというようなお話になったわけでありまして。

やはり、始まりは非常に小さなアイデアだったかもしれませんが、それが先ほどの田中代表世話人のお話の寄って、たかってではありませんが、どんどん盛り上げていくうちに全国クラスの行事に成長していった。第28回ということ、28年続けていくとこれだけのものにもなり得るということを思ったところでありまして。

そういった、最初は小さなアイデアでもみんなで寄って、たかって盛り上げていくうちにきっと大きな流れをつくることもできるのではないかと、そんなふう考えているところでありまして。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございました。

今までの通算で見ますと、信州の国が15勝

でしょうか。

飯田市 牧野市長

15勝13敗。まだ2勝勝っています。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

ということでございますので、ぜひ頑張っていたきたいと思います。

では続きまして、松川の町長さん、よろしくお願いいたします。

松川町 深津町長

私どもの町は、ちょうど南信州の、今日出席をされております飯田市さんと駒ヶ根市さんのちょうど中間に位置をいたしております。人口1万3,500人の町でございます。中山間の町でございますけれども、果物で非常に売り出しております、非常においしい木、果物で、サクランボからスタートして桃、貴陽、ブルーベリー、梨、桃、リンゴということで、年間を通じて果物の、果物狩りで町を非常に売り出しております。

町でございますけれども、直営の温泉がございます。それを単に温泉だけで終わらせないように、その周囲一帯を滞在型にしたいという思いで、清流が流れておりますので、河川敷の公園、それから温水プール、それからパターゴルフ場、マレットゴルフ場、テニスコートというスポーツ施設、そして奥にセラピー基地の認定をいただきまして、癒しの空間ということで森を整備し、それから奥地へ入りますとダムがあるという形。

それから、森林を生かして里山を生かしていきたいということで、フォレストアドベンチャーという木の上、おおむね10メートルぐらいの高さのところをずっと歩く施設を今年整備をいたしまして、その辺一帯を歩いて癒しの空間として楽しんでいただけるということを目指しております。

それから、観光地、観光客を誘客するについて着地型観光を目指していきたいという思いを持っておりまして、農村の空き家の利用、それから昨年からは地域案内人講座というのを設けてまして、ボランティアで参加をいただいて、今、地域案内人の皆さんが、今年に入りましてもう1年がたちましたので、今、実験的に地域の案内をするということを始めつつあります。

地域が観光地で来ていただいた方たちへ提案のできる、地元の人たちが考える食、あるいは文化というものを、地元の人たちが提案できる形態をつくっていきたくて思っております。

課題としては、先ほど道使い力という言葉が出ておりましたけれども、三遠南信、リニアの時代を迎える中で、やはりどうしても単体の町村ではキャパシティが知れております。どうやって連携をとっていくか、これが大きな課題ではないかなと思っております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございます。

今、お話にありました着地型観光に皆様は、どのようなイメージをお持ちになるでしょうか。私は、常在観光だろうと思っております。要するに、あるものを使っていくということですから、あえて着地というのでなくても松川町さんにあるものを使うことが常在観光であって、農村観光になっている。結果的には、地域発の観光になるという筋書きなのかなと思います。その意味では、農業や地場のものを使って新しい観光の展開をしているというご発言だったと思います。

では続いて天龍村の村長さん、よろしくお願いいたします。

天龍村 大平村長

祭り街道弁当の表紙に大きなナスがござい

ますが、これは天龍村特産のテイザナスですが、ナスの事業は12月でございまして、今回は取りやめます。

温泉の話をするようにということで来ましたので、温泉の話を少しさせていただきます。

ご多聞に漏れず、1億円のときに温泉を掘りまして、出まして、天龍村では土地の祭りの名前をつけておきよめの湯という温泉を、今、経営しております。

そこで、単なる温泉だけではということで、村の若い人たちが、ほかへ持って行って温泉をつくったらどうかと。つくるということはできないので、足湯をほかへ持って行って、運んで皆さんに楽しんでもらったらどうかという案が出まして、一部の者たちが足湯の装置をつくりまして、あちらこちらへ今持って行って、足湯を楽しんでいただいておりますが、きっかけは豊橋市の動植物園との話で、豊橋へ一番持って行ってありますが、動植物園に来るお客さんに楽しんでもらうと。同時に村の特産品もその場所で販売させてもらうというような条件のもとで、足湯の事業をしております。

これも、本来ならば湯を運ぶというのは大変なのですけれども、ご存じのように天龍村は中央を飯田線という電車が通っておりまして、その飯田線に混ざって駅がございまして、その駅にステーションビルをつくりました。そのステーションビルの中に温泉をつくって、ちょっと離れた、十四、五キロ離れたところがそのおきよめの湯の場所でございますが、温泉を運んで、駅でも温泉を始めております。

そのためにはどうしても輸送をしなければならぬということで、温泉を運ぶタンクローリーも持っておりますので、いずれの場所へ行ってもそういった足湯ができるということで、豊橋の動植物園を初め、例えば有名な名古屋のマラソン、シティマラソンにも持って行って、走った方に楽しんでもらったと、癒してもらっていると、こういうことを今や

っております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

ありがとうございました。

では続きまして駒ケ根の市長様、よろしく願いいたします。

駒ケ根市 杉本市長

今まではオブザーバーということでございましたけれども、正規のメンバーにさせていただいて、今日は初めて出席をさせていただきました。

駒ケ根市、この三遠地区との縁は、実はお隣の磐田市さんと友好都市を結んでおります。これも早太郎伝説という伝説がありまして、うちでは早太郎、磐田市さんでは悉平太郎といいますが、駒ケ根市にある光前寺の早太郎という犬が、見付神社の人身御供のかわりになってヒヒ退治をしたという、そういう伝説に基づいてうちと友好都市関係をしております。

青崩れの途中にも、その早太郎のお墓がありますので、そういう意味でいきますと、まさにこの三遠南信との、古い昔からそういう縁があるのかなと思いますし、今回できる三遠南信道路というのは、私から見ればその早太郎伝説の道かなと、そんなことを思いますと、当時から人々が一番短い道としてこの秋葉街道を中心とした道で生活していたのかなと、そんな感じがしております。

そうした中で、駒ケ根市、これからいよいよ市制60周年を迎えました。新たな、これから第4次総等の作成をさせていただきまして、その中の大きなキーワードの一つの三遠南信自動車道がいよいよ現実のものとなったということ。

それから、リニアの中央新幹線も現実のものになった。これから多分13年、リニアが13年後です。三遠南信道路も多分そのころには

開くのではないかと考えておまして、いろいろな意味で少子高齢化と言われておりますけれども、そういう中であってもこの三遠南信、230万の規模の中の一員となることによって、経済効果等を生かして地域の発展を図っていきたく、今、そう考えておまして、実は具体的には交流人口を新たに200万人増やそう、それで1人1万円お金を落とすとしていただこうと、そんなことを思っています。

そのキーワードが、二つありますけれども、一つ一番大きいところは駒ヶ根市青年海外協力隊の訓練所、JICAの訓練所が日本に二つあるのですけれども、駒ヶ根市と二本松市、その訓練所を生かした国際交流のできる場所をつくっていきたく、今、大使村構想といったようなことを立ち上げておりますけれども、JICAボランティアは全体で4万人近くが発展途上国に行っておりますので、そういう人たちの活動や、いろいろな国の食とか文化とか、そういったことに触れられるような、そういうことをしてまた新たな発展基盤をつくりたいというのが一つあります。

あとはやはり健康ですね、健康長寿といったことをキーワードにして、そこに来て、やはり自然環境の中にいるだけで健康になれると、そのようなことを、二つを大きなキーワードとして新たな発展基盤をつくっていきたく、今、そう考えておまして。

こういったことは、先ほど松川町の町長さんからも出ておりました。1市町村のみでやってもなかなか魅力は高まりません。そういうことになると、私はぜひストーリー性を持ったような物語を必ずつくっていくことが一番重要なことだと思っています。

今回、塩の道ということですので、今、駒ヶ根市はゴマをつくっていますので、第6次産業化でゴマをつくり出して6年目で、今、今年8トンぐらいできましたかね。塩にゴマを入れて、ごま塩になりますかね。そんなこともできるかなと思いますし、今の、あ

とは、町おこしといえばソースかつ井でB-1グランプリに出ておまして、先週ですか、秘密のケンミンショーで長野県、福井県、群馬県のどこがかつ井かと、取り上げていただいたりしましたので、先ほど、ちょうどこのソースかつ井も取り組んで20年になったのです。やはりそういった20年、着実に取り組んできたことがやはりマスメディアにも取り上げてもらったのかなと思いますと、やはり地道な取り組みがまた一方では必要なのかなと、そんな思いがしておりますので、そんな町おこしをしていくためにも、よりよい、この三遠南信の中での連携ということをしていければいいのかなと思っています。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございます。すばらしいメッセージを送っていただきまして、ありがとうございます。後ほどご議論いただきたいと思っております。それでは、磐田市の商工会長さん、よろしく願いいたします。

磐田市商工会 野寄会長

奇遇といえば奇遇で、駒ヶ根市さんと初めて正会員になられてお隣に座らせていただいて、本当に奇遇で、これを機にますます連携を深めていきたく、今、そう考えておまして。

それから、先ほど、我々は「しっぺい」というのですが、去年の「ゆるキャラグランプリ」に出まして9位ということで、参考に浜松は2位ということだったので、今年も磐田市はチャレンジをしておりますので、ぜひ1票を入れていただいて、2位といわずにぜひ優勝をしてみたいなと思っています。よろしく願い申し上げます。

それから、我々磐田市商工会は6年前に4商工会が合併をいたしました。合併区域は、海岸部と山間に接する農村部の豊岡、豊田、竜洋、福田という形で合併をいたしました。

その4商工会の合併効果をどのような形で具現化をしようかということの企画として、何があるのだろうと考えてきたわけですが、その検討した結果、磐田スイーツを開発しようじゃないかということで、第1回を平成23年度に実施をし、本年度は第4回目となっているのですが、戻りまして、その目的は何なのだということをお話しますと、第一に、商工会が合併をして統一事業をすることによって従前の商工会の垣根を取り外すためのきっかけづくりにしたいなという思いがまずありました。それから第2番目に、先ほどから申し上げましたように農商工連携、6次産業化事業の一環として取り組んでまいりたいと。それから、その実行委員会には行政から磐田市、磐田市商工会議所、それからJA遠州中央、それから磐田市菓子組合、加えまして産学共同事業との思いも込めまして静岡農業大学、それから磐田農業高校も参加をいただいております。

それから、そのスイーツコンテストをすることによって地元の農産物の確認と広報を市内外に発信をする、コンテストを活用して、ツールとしてそれを利用してまいりたかったということがありました。

それから、第4点目としまして参加型イベントをつくりたかったわけですが、観衆になるだけではなくてイベントに参加をしていただいで、それを大きな一つの事業にしたかったということ。市民が参加をしていただく、将来的には審査も皆さんにお願いをする企画も考えております。

それから、今まで使用されておりました農水産物は、やはり我々は磐田地区なものですから、エビイモがやはり多く素材として使われました。それからチンゲンサイであるとか、長ネギ、トマト、メロン、そのようなものがありましたし、水産物もシラスが一時入ったことがあります。

3回開催しましたが、1回目は磐田トマト

の輝き、これはババロアのようなものでした。第2回目の優勝は、磐田の味をそのままにということで、これはエビイモを使ったパウンドケーキのようなものでした。それから第3回目、去年ですが、エビイモチップス、これはやはりエビイモなのですけれども、ポテトフライふうにやったのが最優秀ということで、かなり市民の皆さん、それから市内外の皆さんも参加をしていただいて、3回目であるのですが、先ほど言われたようにこれを20回、30回と開催し、メディアにも取り上げていただけるような事業にしていきたいと努力をしているところです。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、どうもありがとうございました。

後ほど議論で振りかえりをさせていただきます。

続いてもう御一方、住民団体から参加いただいております、みらい企画・律の矢澤さんお願いいたします。

みらい企画 律 矢澤代表

お手元に資料と冊子を2冊お配りしてありますが、それに基づきまして説明させていただきたいと思っております。

一昨年、三遠南信エリアの文化を全部網羅した本を5シリーズ発刊しました。その2冊、祭り事典と特産事典が今日関係しておりますので、それをご覧いただきまして、非常に、この本に紹介されていますように、三遠南信地域の文化は豊富でしかもバリエーション豊かです。南信州だけで見ますと、長野県内には国指定の祭りが九つあります。そのうちの五つが南信州の祭りで指定されていますので、とにかく伝統ある祭りを全国の人たちに発信し、ここに来ていただきたい。そして、お金を落としていっていただきたい。それにはやはり、新鮮な感動や喜びが大切に

す。

そこで、私は南信州交流の輪というところの会員ですけれども、この一番の強みである祭りとバリエーション豊かな食を融合させた祭り街道弁当を開発し、南信州のブランドにして全国に発信しようと考えたのです。これは、全国でも初の企画だということで非常に期待されております。

そのプロジェクトを昨年発足し、3カ年を第1ステップとして、今年は試作の年としました。まつりは春夏秋冬、それぞれの祈りのテーマがあります。その中から第1弾として選んだのが、冬の霜月神楽です。霜月神楽は、南信州では飯田市上村、南信濃、天龍村で12月から1月にかけて行われます。

この霜月まつりは、新しい命をいただく祭りとして有名です。湯立てを行い、その神聖な湯を神様がいただき、そして人もいただくということで、生まれ清まるということです。

では、それを食にどのように演出するか。さらに、祭り食は神仏への供え物でもあり、その土地の旬の食材を使った伝統食でもあり、和食です。最後にチラシをつけておきましたが、いよいよ来月11月8日に阿南町かじかの湯でお披露目されます。霜月神楽を代表して、天龍村坂部の冬まつりを鑑賞した後、オール竹の器です。神楽舞と名付けた祭り街道弁当を食べていただきます。80食限定ですが、既に地元や浜松、豊橋、東京からのお客様で完売となっております。

食の全てに霜月神楽のキーワードを盛り込みました。食事が終わった最後に清め湯を飲んでいただき、生まれ清まりを体感していただくという、そういった趣向にもなっております。

お客様の反応がどうでしょうかということで、楽しみにしております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございます。

一巡目のご発言をいただきました。地域資源をどう使ってどのような地域おこしを取り組んできたのかのご発表をいただきました。共通しているところは、20年ですとか28年とかなりの年数をかさねてというのでしょうか。

お聞きいただいたように、イベントがあったり農産物があったり、それからJICAや海外との交流の事例が紹介されました。それぞれの取り組みの中から、地域の資源を使って工夫をされたということがお聞きいただけたと思います。

では、これをどのように繋ぐのか、広げるのか、掘り下げるのかが課題となってくると思います。それぞれの方がおっしゃったように、基本的には主要な道路や道という交通基盤がやはり必要なのかなと思います。三遠南信道路という新しい道と生活しているこの地域の中の道という地域資源を使って新たな知恵を出し、外との交流をしながら地域へ人を呼び込むことも一つの手立てになるのかなと受けとめました。

各市町村さんからは、事例を出していただきましたので、これを受けとめていただき、それぞれの工夫、知恵をぜひ共有していただければと思っております。

では、次に進めさせていただきます。地域資源を使って、具体的に外に向かってのプロモーションや交流者・ファンづくりをした視点から、どのような工夫をされたのか、手立てをしてきたのかを含めてご発言をいただきたいと思います。

発言順でございますが、田原の市長さん、阿智の村長さん、天龍の村長さん、大鹿の村長さんと民間団体のみなと塾さんの順でお願いしたいと思います。

では最初に、田原の市長さんから、ファン

獲得のための工夫と併せて事例のご報告をお願いいたします。

田原市 鈴木市長

愛知県が一番南端の渥美半島の田原市でございます。

さきほど、矢澤さんが紹介された特産辞典の10ページに渥美半島どんぶり街道の大変おいしそうな写真を掲載していただきまして、ありがとうございます。私も地域、渥美半島は何ととっても農業産出額日本一でございます、キャベツ・ブロッコリー・トマト・セロリなどいろいろな野菜が生産されていますし、畜産物も非常に豊富でございます。三方を海に囲まれて海の幸にも恵まれております。

渥美半島が一つになったのが平成17年、何か地域資源を使って特産品を開発しようじゃないかという動きの中で、国土交通省が取り組む日本風景街道に渥美半島は菜の花浪漫街道という形で登録することとしました。また3町が合併したことで道の駅も3か所ございました。この菜の花浪漫街道の道、道の駅を使った形で何ができるのかを話し合い、渥美半島の豊富な食材を活かした手軽な「どんぶり」がいいということになり、平成21年1月にどんぶり街道がスタートしました。

当初、募集したところ全体で22店舗でございましたが、非常に好評のため、2年ごとのサイクルでリニューアルしようということとなり、平成23年には30店舗に増えました。これも一般公募をしながら、審査をして、選んだ店舗数でございます。また2年後の25年1月からは43店舗に増えています。よりどりみどりのどんぶり、テレビなどのメディアに度々紹介されており、非常に好評であります。今では、年間約12万食、月に約1万食が渥美半島で消費されております。シーズンとしては、菜の花まつりを開催する冬の時期と夏が中心となり、ずいぶん定着してきたのか

など。

ただ、やはりこういった事業というのは継続性が必要です。どんぶり街道の手形をつくって、スタンプを集めていただくと記念のどんぶりがもらえる。今はもっとリピーターを獲得しようということで景品、半分達成するとメロン狩りの券、あるいはイチゴ狩りの券をお渡しし、また渥美半島に訪れてもらおうとか、そういった工夫も凝らしています。来年1月から新しいスタートとなりますが、半分の店舗で新メニューに変更するなどして、リピーター客を獲得していこうとしているところでございます。

一方、全国展開のPRとしては、東京の百貨店に一部店舗が行き、どんぶりを売り出しています。さらに、全国井サミットというのが平成22年から開かれておりまして、これにも参加しております。近いうちには、この渥美半島田原で全国井サミットを開催してみたいと思っております。

また、渥美半島の太平洋岸は、サーフィンのメッカにもなっております。年間を通じて15回ぐらいの大会があり、本当に大勢のサーファーが訪れております。このサーファーに手軽などんぶりが人気であるということで、全国から来た若者たちが、全国各地に戻ることで、ロコミの宣伝をしていただいているのではないかと考えております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございました。

では続きまして阿智の村長さん、お願いいたします。

阿智村 熊谷村長

では、南信州の昼神温泉があります、阿智村でございます。

もうまさに、先ほどからいただいております地域資源のこととか、やはり祭り街道のこ

とという、伝統文化というのは非常に大切な三遠南信のキーワードだと思います。

私もみらい企画さんが編集していただいた祭り辞典の中の、51 ページに、阿智村に清内路というところがありまして、その手作り花火がありまして、これが280年間も続いている伝統行事でございまして、これが本当に、全国からこれを見たいと来てくださる方が多くおりまして、もう日も10月6日と、10月上旬の日曜日と決まっていますが、土曜日かな、決まっています、本当にこういった伝統文化をやはり続けることというのはすごく大事だなと思いつつながら、私も実感をしています。

そうやって、その中でやはり地域資源とか伝統文化をどう生かすかという、プロモーションとか、どう広告宣伝していくかということが重要だと思いますので、非常にそこがどんなことでも悩ましいことだと思うのですが、そこで、私も阿智村なのですが、全体会でも発表会させていただいたのですが、例えば星がきれいとかいろいろとあるのですが、阿智村も、先ほど松川町長さんとお話いただいたように、全村博物館構想というような構想をつくって、要は滞在型で、村の中どこへ行っても観光、いろいろな面で勉強ができるし観光もできますよというような思想で、うたい文句でやっているのですが、そこをどうプロデュースしていくかということが、やはり温泉もありますので、自分たちの力でいろいろなところに、こうやってキャラバンを組んだりいろいろやっているのですが、ただそれだけではやはり追いつかないものですから、私も、温泉もあるということでございまして、JTBさん、大手旅行代理店さんと提携を結ばせていただいたり、あとは広告代理店さんと結ばせていただいたり、あとは企業さんと結ばせていただいて、実はプロデュースとかプロモーションを行っております。例えば、星の関係もJTBさんと組んでそ

ういったことで広告をしっかりと打って、もうターゲットは中京圏とかそういったところにしっかりとやりました。あと、毛利衛さんという宇宙飛行士を呼んでそういった企画もやり、要は温泉とセットでそういうのに来てもらいましょう、温泉とセットでこういう伝統文化を見てもらいましょうというような企画を、地域型観光ということでJTBさんも思想と一緒に組んでいただいて、やっております。

また、広告代理店さんともお願いをしまして、この前なのですが、ダイハツさんと組ませていただいて、オープンカーの新車の発表会をさせていただいたものですから、それを、オープンカーを開けると要は星が見えるとか、そんなようなことで全国のオープンカーの持ち主を募集いたしまして、阿智村に来ていただいて、阿智村を走り回ってもらったという、そういうようなことで、ちょっと一風変わった戦略でできたのかなと思っています。

もちろん、自分たちの足でしっかり宣伝とか観光をしていかななくてはいけないと思いますが、やはりそういったこと、借りることも一つの重要なことかと思いつつ、そういったことでこの三遠南信も連携してやるということも大事だと思いますので、一つ、これもやっていたことの例でございまして、報告させていただきます。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございました。

ときには、企業さんとの連携が必要であると強調されたと思います。JTBさんとの連携での新たな地域型観光をつくり出していることのお話だったと思います。

では続きまして、大鹿の村長さん、お願いいたします。

大鹿村 柳島村長

大鹿村は、南信地域では一番北だったので

すが、今度は広くなりまして、駒ヶ根さんとか宮田村さんが加わられましたので一番北だと言えなくなってしまうのですが、南アルプス赤石岳のふもとにあります。人口1,100人ほどの小さな村でございます。

地域の行事としては、大鹿歌舞伎があります。春と秋の2回の定期公演が行われておりまして、お客様が大体村の人口以上に集まっていただけという文化を継承してきているところがございます。

この大鹿歌舞伎を題材に、大鹿村騒動記という映画をつくっていただきました。これで大鹿村の名前が非常にメジャーになったのかなと思っております。

この歌舞伎なのですが、いわゆる農村歌舞伎ということで、やはりこの祭り辞典の中の目次を見ていただくと、この中だけでもそれぞれの地域の歌舞伎が四つほど載っております。この地域の歌舞伎の交流会をもう20年近くやっておりまして、毎年3地域を持ち回りで演じているところがございます。今年も11月の終わりでしたか、佐久間町だったかと思えますけれども、行われるようになっております。そんなつながりがこの地域の中にあるのかなと思っております。

大鹿村の特徴ですけれども、1,000人の村に博物館かよということによく言われるのですが、地質学上、中央構造線という大きな断層が村を縦断しております。それを題材とした中央構造線博物館というものがあります。地質を主体とした南アルプスのエリアを、ジオパークの認定を受けております。今年はこのジオパークについて伊那市と一緒にやっておりますので、全国大会が開かれたということもありますし、ユネスコのエコパークの指定も受けました。そのように、貴重な地質、また動植物の存在する場所として非常に注目されてきております。

こういうことになりますと、表現はよくないのですが、比較のおたくっぽい方は、よく

お見えになるということで、このような面での興味を持たれている方の来訪が増えていると思っております。

そんな点を含めまして、大鹿のサポーターとして現在募集を始めたところでございます。登録者にはいろいろな情報を流して、広めていただきたいと考えて、今年度からの取り組みになっております。

最後に、ちょっと的外れになるかもしれませんが、大鹿村からすると、皆さん力を入れておられる三遠南信自動車道がずっと、152号を併用しながら飯田市上村までずっと北上してきます。そこからなぜかずっと西の方へそれていきまして、大鹿村の方には近づいてこないというのが現状でございます。今でもこの国道152号は冬季閉鎖になっているというような状況でございますので、今後、今度は駒ヶ根市さん、それから伊那市さん、さらには地の諏訪の方へつながっていくためには、この152号が国道で通年の通行ができるようになるというのが、我が村の夢であり望みであり、また皆さんのご協力をお願いしたい部分かなと思っております。よろしく願いいたします。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、どうもありがとうございました。

天龍村の村長さん。

天龍村 大平村長

先ほど、私は温泉のことを言いました。

温泉もやはりいい湯ということで、宣伝のために足湯を運んでおります。大変、皆さんに好評をいただいておりますし、ある道路地図の会社が全国でベスト10をやったときにも、中部、南信、北陸の温泉の中でナンバーワンの名称をいただきました。

そういういいお湯ですから、皆さんに知っていただいてぜひ来ていただきたいというこ

ともあって、足湯を運んでおりますが、ただ私は天龍村のお湯だけではやはり自分だけでございますので、近辺のそれぞれの温泉を交互に運んで、それぞれ紹介をしたいという、そういうことも企画しておりますので、ぜひご希望の温泉がありましたら一緒に運んで、一緒にといても一緒にするわけにはいきませんので、それぞれ運んでその線でも努めさせていただくと、こういう企画もしておりますので、どうぞよろしく申し上げます。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、どうもありがとうございました。

では、みなと塾の加藤さん、お願いいたします。

みなと塾 加藤代表

みなと塾は、地元のこと、三河湾のこと、豊川のことなど身近なところを勉強してみようと定年になってから始めました。

私は三河湾に面し、豊川の河口にある前芝に住んでおりまして、学校を出てから5年間ほど家業の海苔養殖業をやっていたのですが、昭和の40年当時、いわゆるあの頃は工業化というか新産都市がどうかという、そういう時代で、漁業補償の話が出てきたので、陸へ上がったわけなのですが、定年になってから改めて海岸を見てみると、私が当時浜に出て海苔を採り、アサリを採っていた浜と大分様子が変わっていました。

愛知大学で豊川流域圏講座というのがありまして、それに参加させてもらっているうちにいろいろ仲間ができて、そこから具体的に活動を始めたわけなのです。

まず、第一番に始めたのは地元を知ろうということでした。地元を知らずに外のことをせかせとやっておられる方が割合多いのですが、みなと塾は地元の昔のこと、歴史から今現在のことまで含めて、得た情報を「みな

と塾」という機関誌に掲載しまして、広くお配りをして目を通してもらっております。

今、65号を発行しました。創刊号は7部だったわけなのですが、今回は600部を印刷しました。それをお配りさせてもらっています。

三河湾については昔とは大きく変わっているわけですが、今の三河湾しか知らない人には昔の三河湾の様子を知ってもらわないと、今の三河湾がいかに汚れているかということがわかりません。昔と今を比較して、これではいけないと認識してもらうために、昔、きれいであった頃の三河湾の資料を集め、写真を集め、お年寄りから昔の浜の様子を聞き取りし「みなと塾」で発表しています。ということで、現在「みなと塾」を通して、このままの三河湾でいいのですかというところからスタートしております。

その中の一環として、南信の関係でいきますと、前芝海岸へ当時遊びに来ていただいた方にアンケートをとらせてもらっております。アンケートをとるについては、ピンポイントになるわけですが、その結果を「みなと塾」で発表しています。

飯田市の方だとか下伊那郡の売木村の方だとか、阿南町の方だとか、ここにお見えの矢澤さんも、私は子供のころ前芝海岸へ行きましたよという返事をもらっております。

そういった材料を寄せ集めて、昔の三河湾はきれいで、前芝海岸はこれほどにぎわっていたのだよということを、今、証明をしている最中です。

具体的には、飯田市のあるグループと交流会をする、豊川流域の関係の方との上下流の交流会をする、それから昔の海苔づくりの道具づくりをしてみようとか、昔の古い写真を集めて前芝海岸の写真展をすとか、できるだけ、みなさんに三河湾に関心を持ってもらおうという取り組みをしております。

この三河湾で現在とても貴重になった地域資源、地元では種子アサリと言っていますが、

アサリの稚貝が注目されています。この種子アサリが六条潟の浜で湧くように採れています。このアサリの稚貝を採り、愛知県内の各浜へばらまいて養殖をし、各浜で潮干狩りを行なうとか、生アサリを採って販売ルートに乗せるなどしているわけですが、その愛知県のアサリが全国生産の6~7割を占めているのです。この現実をみなさん承知しておいて下さい。三河湾はこれだけの地域資源を持っているところなのです。

それから、昔は海水浴、潮干狩りで年間10万人も人を集めた浜なのです。それが今は泥の浜になっているということで、人が寄りつかないようになってきました。

しかし昨年、どこからどう現れたのかわからないのですが、40年余消えてしまっていた幻のハマグリが、突然10センチメートルもあるような大きなハマグリがひょこひょこ出てきて、前芝の浜はどうなっているのだというのが、去年、今年の状態です。

ですから、地域資源は確かにみんなで創り出すことも大事なのですが、昔からある自然のものを大事に保全する、うまく使う。それが本当の意味での地域資源の活用になるのではと思うところです。ということで、三河湾をできるだけ守っていきこうと活動をしております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、どうもありがとうございました。皆様には、もっとお話いただきたいと思うのですが、この会場は5時迄との制限を受けていますので、ご協力をいただきたいと存じます。

今、地域資源を使って村おこし、地域づくりをする中で、そのファンをどのように確保したのか、その仕組み、知恵についてご発言をいただきました。それぞれの市長さん、村長さんともユニークな取り組みというのをされていることお披露がございました。

行政の役割、企業さんの役割、地元の人たちが絡み合っていないとうまくいかないことの指摘が、それぞれのご発言の中にあっただと思います。こうした取り組みの情報を広域のあるいは小域で束ねていく仕組みや組織が必要であろうし、それがSENAさんであり、市町村さんであり、観光協会さんかもしれません。いずれにしても束ねる機能がないとすればご発言にあったネットワーク化ができないのではないかと思います。一つの課題として、提起をされたら受けとめたわけでございます。

それでは、最後の発言となりますが、事前に発言の方々からアンケートに回答をいただいております。その中の「地域連携」に関して伺います。連携というものが必要なのか、方向はどうなのか、課題は何なのかということをご発言いただいで締めたいと思います。

6名の方を指名させていただきますが、3分以内でのご発言をお願いいたします。

では、飯田の市長さんから、お願いいたします。

飯田市 牧野市長

この後どういうふうにごこうした地域資源をしっかりと守り育てていくために連携していくかという、そんな話になっていくかと思いますが、ちょうどSENAも新しい組織に衣がえして、SENAの構成員自体が拡充されたということもあるかと思います。そうした中で、外部への発信力も当然高めていかなければならないわけでありましてけれども、それとともに三遠南信のお互いのことをお互いに学び合うと、そういう意味でこのみらい企画さんがやっていただいたこういった祭り辞典やこのような辞典シリーズ、こうしたものは大変有効な試みではないかと思うのですけれども、かなりそうした、それぞれの地域の皆さん方が一生懸命いろいろなことをやって成果を出しているわけでありましてけれども、やはり三遠南信

の中でそうした情報を共有し合う、そういった仕組みというものをますます充実させるために、うまく SENA の組織も使っていくことができると、そんなことを思っております。

それを通した中で、内外の発信力を強めていく。三遠南信といってもまだまだ、外に向かって見ますと三遠南信って何と、それってどこという感じのところがあるわけですが、やはりこうした三遠南信というこの地域、圏域自体も外へ向かっての発信力を同時に高めていくということがやはり大事ではないかなと思います。

そのために、行政、あるいは三遠南信住民ネットワーク協議会、あるいは産業界の皆さん方、それぞれの個々の努力だけではどうしても足りないところがあると思いますので、いかにこの連携した仕組みをつくっていくか、そのための SENA の役割というのは相当大的なものになっていくかなと、そのように思っております。

コーディネーター／

NPO 法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

ありがとうございます。

では続きまして、田原の市長さん、よろしくお願いいいたします。

田原市 鈴木市長

冒頭にネットワークの田中世話人の基本となるお話、報告がございまして、そこで思いましたのが、地域の活性化を図るため国を挙げて6次産業化を進めているけれども、それぞれ道の駅にある山や海の特産品が6次産業化の産品ではないかということ。そうした中で、やはり道の駅をどう活用していくか。三遠南信には道の駅がたくさんあり、海の幸、山の幸がいっぱいありますので、道の駅のネットワークを構築することでうまく進めることができるのではないかと思います。まさに地縁店というのはそういう発想ですよ。

地域の中でお互いを知り、お互いで支え合うという仕組みができるのではないかと。これは全体でやると大変かもしれませんが、個別で道の駅同士で行う方法もあるし、SENA でコーディネートしていただくこともあるかと思っています。

昨年も紹介させていただいたのですけれども、貧しいときの渥美半島の農家は芋をつくっておりました。今となり、昔ながらの芋を育て、亀若という芋焼酎にしています。田原市内で醸造ができないため、飯田市の喜久水酒造にてお願いしております。残念ながら、去年は2,000本で今年は5,500本の販売ですので、田原市内と一部豊橋ぐらしか販売されておられません。非常に好評のため来年はさらに倍増しようとしています。このように、三遠南信地域の中で6次産業化という芽もまだまだあるのではないかと思います。

今日は、亀若という芋焼酎を持ってまいりましたので、ぜひ交流会で味わっていただきたいと思います。できたら、ロックでちょっと水を入れると芋の味がしておいしゅうございます。

いろいろな道の駅や販売店で、三遠南信の美味しいお酒を販売しています。三遠南信の中で自分たちの圏域ではこんなおいしいものがいっぱいあるじゃないかというような情報の共有化、あるいはその販売を行っていくためのネットワークやアンテナショップの仕組みをつくっていくとおもしろいのではないかなと思っています。具体的にやれるところから行動することが一番、今は大事じゃないかなと思っています。

コーディネーター／

NPO 法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、どうもありがとうございます。

続いて、松川の町長さん、お願いいいたします。

松川町 深津町長

今までのお話の中にもちよくちよく出てきましたけれども、どうプロデュースしてどう連携をとっていかということに尽きるのではないかなと思っております。

それぞれの地域にはそれぞれの宝があり、今もお話をお聞きしておりますと、皆さんそれぞれに、一生懸命それを発信して何とかやっていこうと。それらがどう連携していくか。

まずはやはり、基盤整備をきちんとする中、三遠南信、あるいはリニアのみならず、今度はそれぞれの県道、町村道、どこをどのようにお客さんに通ってもらって、どのように動いてもらうかということプロデュースしていく、連携をとっていくことが非常に大切ではないかなと思っております。

それがこの三遠南信サミットの関係の中で、一歩でも二歩でも前進をしていけばいいなと感じております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

ありがとうございました。

では、駒ヶ根の市長さん、お願いいたします。

駒ヶ根市 杉本市長

いずれにしても、情報発信をしっかりしていかないことには興味を持ってもらえないわけです。

個別の基礎自治体など、地域では、今、頑張っているというお話がございました。そういう中に、先ほど田中さんからもお話がありましたけれども、やはりその地域における歴史とか風土とかかわりというのですか、そのようなことにどう位置づけるか、それをさらに、何かストーリー性を持たせてどのように情報発信をしていくかが非常に大事ななと思います。

そういう点で言いますと、昔は何とかあれ

ば秋葉街道とか何とか街道とか、連携づけるのは152号とか151号ではおもしろくないので、何とか街道とか何とかの道とか、そういうのはアイデアだと思うのですよ。みんなが興味を持ってもらえると、自然とその道を行けばいろいろな地域の中を回って行って、それぞれの地域の歴史とか伝統文化、また食、そういうことに行き会えるとなればおもしろいかなと。

私はそんな感じがしていますので、ぜひ何かストーリー性を持たせ、またそれぞれが連携する三遠南信というのを、何か新しい言葉があるのか、その言葉がいいのかどうかわかりませんが、みんな発信するというのをこのSENAの中で十分みんなが話し合い、魅力を持たせていければ、いよいよ三遠南信道路が開きますし、そのインフラに合わせておくれなように前々からそういう発信をしていくことが、開けばこうなるよという、そういう情報発信をしていくことがこのSENAの果たす大きな役割かなと、そのように思っております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございました。

三遠南信道路を新たな街道として使う手立ても必要であると受け止めました。

では、磐田市の商工会長さん、よろしく申し上げます。

磐田市商工会 野寄会長

私は、マーケティングの側面から言わせていただきますと、今、先ほどのシンポジウムにも言っていましたけれども、少子高齢化が非常に急スピード進む中、ターゲットを国内だけでいいのかと。

やはり、ここは外国人にも、来ていただいて、魅力ある三遠南信の素材を堪能していただくという努力もしていただきたいと思います

思っております。

たまたま、私、昨日台湾から帰ってきたのですけれども、そこでいろいろな観光業者の方にも会ったのですけれども、中国人も韓国も台湾も、特に台湾の人は日本が大好きだそうです。何回も来たいという気持ちがすごくあるのだそうです。

そういった意味では、ものすごい将来性を日本、特に三遠南信は持っているのではないかと思いますので、そこらも切り口のの一つとして考えていただければなと思っております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございました。

では、最後に民間団体のみらい企画・律の矢澤さん、お願いいたします。

みらい企画 律 矢澤代表

さっきのチラシの前のところ、A4判の横位置でプリントしたものがあつたのですけれども、私はこれをしみじみと見て、こうしたいと、このようにしていきたいというのが強い思いです。

やはり、昔飯田は山の都と言われていたのですけれども、山の都の復活、このためにどういうふうにしていこうかなということで、それで駒ヶ根の市長さんからもストーリー性とか物語ということのお話が出たのですけれども、やはり発信力の一つというのは物語性というのは非常に重要な要素だと考えております。

その物語の中に人々を呼び込んでいくと。だから、祭り街道弁当もその一つだと考えております。

物語というのは無限大にありますから、人々の感性とか知恵とかアイデアでどんどん膨らんでいきます。祭りや食文化は歴史ある伝統文化ですので、その基本はきちんと学習する、そしてさまざまな人のかかわり方は多

様ですから、その斬新な考えも取り入れて、その人たちと一緒に活動を広めていく。

今回、11月8日は阿南町かじかの湯の温泉施設で天龍村坂部の冬まつりを鑑賞します。このように、行政枠を取っ払った一体化した取り組みでこの地域全体を文化面で底上げしていくということは、経済効果にもつながると思います。その一步を11月8日だと考えております。

飯田市長さんもいらっしゃいますけれども、リニアの飯田駅ができます、13年後に。そのときをイメージすれば、世界中から訪れるお客様にすばらしい町だと言ってもらいたい。ですので、駅近くに365日、欠かすことなくお祭りやイベントが楽しめ、食事もでき、買い物もできる、そういった集客型のホールがあつて、まずそこで地域文化を満喫してもらおう。そこからまた次の喜びにつながっていく。そういうおもてなしがこれからはすごく大切だろうと思います。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございました。

終了時間まで、あと10分ということで制約を受けています。本来ですともう一巡ご発言をいただくところですが、できなくなつてしまいましたのでお詫びをさせていただきたいと思います。

それで、分科会のまとめとして次の要点に整理したいと思います。

一つは、各市町村長さんからは、地域資源を使った地域の取り組みとその事例をご披露いただきました。具体的なプロモーション、外のファンをどう獲得するか、その工夫について明らかにしていただきました。個々の市町村さんの取り組みが大事であることは、重々分かるのですけれども、境を越えて連携やネットワークを図るためには、具体的なもの・ことをどのようにつくり出すのか、繋いで行

くのか、中間的な支援組織等の在り方が問われると思います。

二つは、三遠南信の広域と小域での連携です。私たちは、住んでいる隣の市町のことを意外と知らない。連携というのであれば、市町のことをきちんと学んでおくことも大事であるとの議論もありました。具体的には、飯田市さんと田原市さんのお酒の関係ですとか、磐田市さんと駒ヶ根市さんのごま塩の関係ですとか、小さなことかもしれませんが、その小さなことが意外と見過ごされているのかなと受けとめました。

そのことを踏まえて、自分たちの足元をきちんと見て、小域で何ができるのか、広域での役割分担を意識し、担い手は誰なのかを絶えず問うことで連携の実体ができてくるのではないかとのイメージを持ちました。連携の実とは、何かです。

三つは、確かに道路ができるということによって生活も文化も変わっていくだろうということは、皆さんがおっしゃるとおりかもしれませんが、それはどのように実証していくのかはこれからの課題かもしれません。やはりその場に住むことが、歴史や風土をつくっていくと思いますので、自分たちの住んでいる場をきちんと見ることも大事であるということでした。

意見交換の中で出されたアイデアとか知恵とか資源の使い方というのは、確かに多様な事業を体系化していくことだと思います。そのことが、観光、農業、交流事業等の地域づくりの展開になろうかと思えます。いずれにしても、個々の市町村の発信と併せて、何との連携を組むのか、その体制は、誰がやるのか等が課題として挙げられました。

それから、地域資源の活用は、行政、産業界、民間団体でも多様な取り組み方をすると思えますので、相互連携を強化する具体的な仕組みなり手立てを出していただきたいと思えます。そして、毎年開催されるサミットで

の議論として、広域的な事業、活動の点検評価を加味してほしいと思えます。やはり広域連携を進めていくための下支えを担う新生 SENA の組織に期待したいと思えます。

最初に、ご報告いただいた三遠南信住民ネットワーク協議会田中さん、各市町村さん、商工会長さん、住民団体の方を含めて「街道(塩の道)を活かす」ことへのご示唆がありました。やはり自分たちが住んでいる地域の歴史とか風土の時間軸をきちんと見据えて、10年、50年、あるいは100年、また1,000年というお話もありましたが、自分たちなりに物語をつくり観光の形成、交流人口の拡大、広域的な観光へと展開することか必要と感じました。

今、申し上げましたことを「風土」分科会の要点として、次のようにまとめ、報告会で発表させていただきたいと思しますので、ご確認をお願いいたします。

1. 意見交換で出されたアイデアやそれぞれの地域が持つ資源を認識し合い、それを体系化して、持続的に観光客誘致できるよう情報の発信力を高めてゆくこと。
2. 地域資源の活用には、民間団体、企業との取り組み、連携を強化する。
3. 三遠南信地域の歴史や風土を学び、それに結びつけたストーリーを持った広域観光の推進し交流人口を増やすことをめざす。

ご確認、よろしいでしょうか。ありがとうございます。

分科会では、お一人3分という短い発言でストレスもあったかと存じますが、後ほどの交流会で田原市のお酒をいただきながら解していただければと思えます。

皆様方のご協力をいただきまして無事に終わることができましたことに感謝を申し上げて、「風土」分科会を閉会させていただきます。どうもありがとうございました。